

# 「ボランティア体験・学習キャンプ事業」の概要 — 口永良部島における生物多様性保全・啓発と「キャンプ事業」の関 りと意義 —

<2019年度・環境省「エラブオオコウモリ保全推進事業」報告書 Appendix 引用>

(2020年10月)

「ボランティア体験・学習キャンプ事業（以下、キャンプ事業）」は、「えらぶ年寄り組」の自主事業として、2016年にスタートした。2年目以降2017年7月～2020年3月は、屋久島環境文化財団の「屋久島生物多様性保全研究活動奨励事業」の助成を受け実施した。

## [1] 「キャンプ事業」の特徴

「キャンプ事業」の特徴を下記に示した。

- ◆「キャンプ事業」の内容  
「えらぶ年寄り組」による島の動植物の保護・調査活動に参加してもらい、ボランティアとして手伝ってもらおう。  
同時に、生物多様性を体験的に学んでもらおう。
- ◆諸費用は無料。  
ボランティア活動に参加することを条件に、「口永良部島エコキャンプ場」での宿泊費や、「キャンプ事業」の参加費・研修費は無料。食材を持参し自炊。
- ◆ユニークな点  
参加者にとっては、島の自然を楽しむ受動的な側面と、ボランティアとして調査活動にたずさわる能動的な側面があり、ユニークである。
- ◆エコパーク理念にかなう  
ユネスコエコパーク地元の会員である「えらぶ年寄り組」にとって、「キャンプ事業」はエコパーク理念（保全と調和した取り組み、学術的な場の提供）にかなう活動である。
- ◆エコツアーとしても可能性がある。  
有償化してエコツアーとする可能性がある。  
日本エコツーリズム協会ホームページの「エコツアー一覧」で募集中のエコツアーと比べても、「キャンプ事業」は特徴あるエコツアーと云える。
- ◆離島の活性化  
「キャンプ事業」は島の活性化に直結する生業ともなりうる将来展望がある。

## [2] 「キャンプ事業」立ち上げの趣旨

口永良部島の環境保護グループ「えらぶ年寄り組」は、2012年の発足以来、口永良部島の情報発信や、生物多様性保全を目的に活動してきた。保全活動の基礎データを得るために島の動植物（エラブオオコウモリ、ウミガメ、照葉樹林の林床植生、タカツルランなど）の生息調査を島民とともに続けている。この間、屋久島町によるウミガメ保護監視業務（2013, 2014年）や、環境省のグリーンワーカー事業（以下GW事業、2014～2017年）の委託、2017年7月～2020年3月の期間は、屋久島環境文化財団の「屋久島生物多様性保全研究活動奨励事業」の助成などを受け今日に至っている（Appendix表1）。

事業の委託を受けて島の動植物の保護や調査活動は充実してきた、しかし、その成果を暮らしに活用したり、生物多様性の啓発に資するという当初の課題を実現するまでには至らずにいた。

Appendix 表1 「えらぶ年寄り組」の活動

年	調査・学習の内容
2012	発足
	動植物の生育・生息調査、保護活動
	島の情報発信 ホームページ「口永良部島ポータルサイト」立ち上げ
	生物多様性の啓発活動 季刊「くちのえらぶの自然」発行 学習会、見学会の実施
2013	屋久島町 ウミガメ保護・監視事業 受託
2014	屋久島町 ウミガメ保護・監視事業 受託 環境省 GWグリーンワーカー業務 受託
2015	環境省 GW業務 受託
2016	環境省 GW業務 受託
2017	環境省 GW業務 受託
	屋久島環境文化財団 「生物多様性調査・啓発業務」受託
2018	屋久島環境文化財団 「生物多様性調査・啓発事業」受託
2019	屋久島環境文化財団 「生物多様性調査・啓発事業」受託
	環境省 「エラブオオコウモリ保全推進事業」業務 受託
2020	環境省 「エラブオオコウモリ保全推進事業」業務 受託

そこで、2016年に参加費が無料の「キャンプ事業」を立ち上げた。事業には二つの側面がある。ひとつは、島外の青少年にボランティアに参加してもらい、若者の助力で生物多様性の保全活動を続けることである。二つ目は、キャンプ参加者は「えらぶ年寄り組」の調査活動を体験することで、生物多様性の重要性の理解がすすむことである。後者の側面は、取りも直さず生物多様性の啓発活動につながる。

さらに、ユネスコエコパークである地元で活動する「えらぶ年寄り組」として、エコパークの理念を「キャンプ事業」によって実践できないか、離島の活性化に役立てられないだろうかという点も、事業を立ち上げる課題の一つとした。

### [3] 事業の実施方法

「ボランティア体験・学習キャンプ」では、参加者に口永良部島の火山活動、暮らしや歴史を学び、動植物調査と自然保護活動にボランティアとして活動する中で生物多様性を体験的に学んでもらった。内容はAppendix表2に示した。

キャンプは通年開催し、参加は随時可能である。噴火警戒地域を除く、口永良部島内で実施した。

#### (1) キャンプの実施体制

「えらぶ年寄り組」が中心となり、島民や来島された研究者の協力を得ながら実施した。参加者から費用を徴収しないため、運営経費は「えらぶ年寄り組」が負担している。初年度の2016年度は財源がなく寄付でまかなったが、本年度は屋久島環境文化財団の助成を受けることができた。今後とも運営経費の捻出が課題である。

#### (2) キャンプの実施

実施年月日：通年

実施場所：噴火警戒地域を除く、口永良部島の全島

キャンプ場所は、「口永良部島エコキャンプ場」

参加対象：自然に興味のある学童・生徒・学生

### (3) キャンプ場施設

口永良部島エコキャンプ場（Appendix 写真1）は、宿泊小屋A（約20平方m、Appendix 写真2, 写真4）と別棟の調理・宿泊小屋B（約33平方m）、およびトイレ小屋Cからなる（Appendix 写真3, 写真5）。



Appendix 写真1

「口永良部島エコキャンプ場」の全景



Appendix 写真2 宿泊小屋A



Appendix 写真3 別棟・調理・宿泊小屋B（軒先増築部分）とトイレ小屋C



Appendix 写真4 宿泊小屋Aの内部



Appendix 写真5 別棟・調理宿泊小屋Bの内部

#### (4) 参加資格と参加費用など

##### 1) 参加資格

参加の対象者は、「えらぶ年寄り組」の調査活動あるいは地域のボランティア活動に参加する学童・生徒・学生であることを条件とした。

##### 2) 参加費用

ボランティア参加を条件にすべてを無料とした。キャンプ研修費（参加費）や口永良部島エコキャンプ場の宿泊費は徴収せず、食事は食料持参で自炊とした。

#### (5) キャンプの内容

「ボランティア体験・学習キャンプ」の内容をAppndix表2に示した。すべてを実施するのではなく、時期や参加者に応じて項目を選択し、組み合わせて実施した。

Appndix 表2 キャンプにおける調査・学習の内容

	調査・学習の内容
1	エラブオオコウモリの生息調査・学習
2	ヤクシカ・ノヤギの被害・生息調査・学習
3	植生調査（シカやノヤギによる照葉樹林の林床への影響調査・学習） ラン類・希少植物の探索
4	アオウミガメの生息調査・学習
5	火山噴火災害の学習
6	島の暮らしや歴史学習 島民との交流会、地区のボランティア活動（草払いなど）

Appndix 表3 「ボランティア体験・学習キャンプ」の日程プラン例（2泊3日）

	時間	調査・学習の内容
初日	到着	
	午後	キャンプ説明、災害学習、島内見学

	夜	コウモリ観察・学習 オプション：植生学習、タカツラン学習、ウミガメ学習	夕飯自炊
2日目	午前	ペリット調査	朝食自炊
	昼	島の暮らしや歴史	昼食自炊
	午後	ウミガメ調査、噴火災害学習、里めぐり	夕食自炊
3日目	午前	ペリット調査、照葉樹林探索、古老語り部	朝食自炊
	昼		昼食自炊
	午後	里めぐり、歴史学習	
	出発	解散式、出発見送り	

季節・天候・参加メンバーなどの状況により、オプションから選んで実施する。

#### [4] 2019年度の実施結果

2019年度の参加者は、来島した生徒、学生、自然に興味のある若者で、専門学校、大学など4グループ18名、延べ44人・日の参加が得られた。それぞれのグループが従事したボランティアの内容や、キャンプ参加期間をAppndix表4に示した。また、これまでの参加者の推移をAppndix表5に示した。

Appndix表4 参加グループと日程(2019年)

参加グループ	参加者数	ボランティア内容	キャンプ参加期間	延人数人・日
屋久島高校	(5)	台風接近で来島中止	8月8日～8月10日	
鹿児島情報高校、東京都立看護専門学校(青梅)、相愛大、関西外国語大、国際医療大	5	ツルラン調査、林床植生調査	8月17日	5
九州大学	1	エラブオオコウモリ調査	11月5日～11日	7
関西外国語大学	1	ノヤギ糞塊調査	12月11日～14日	4
中央大学	6	シカ柵作成、ツルラン調査	2020年 2月18日～20日	18
山形大学	1	ヤクシカ糞塊調査	2020年 2月26日～3月6日	10
合計	14人			44

Appndix表5 参加者の年次変化

参加グループ	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
参加グループ数	6	7	3	5	1
延べ参加人数(人・日)	151	98	28	44	60

#### [5] まとめ

##### (1) 「キャンプ事業」の自己評価

島外の生徒や学生に、島の動植物の調査・保護活動にボランティア参加してもらい、その体験を通して自然の重要性を学んでもらう「キャンプ事業」は、生物多様性の保全や啓発活動として意義ある方策であることを実証できた。

一昨年(2016年)「えらぶ年寄り組」のボランティア事業としてスタートしたが、今年度は、幸いにも屋久島環境文化財団の助成を受けることができた。今後、助成を受けられない事態となっても、柔軟に対処することで事業を継続することは可能であると考えている。

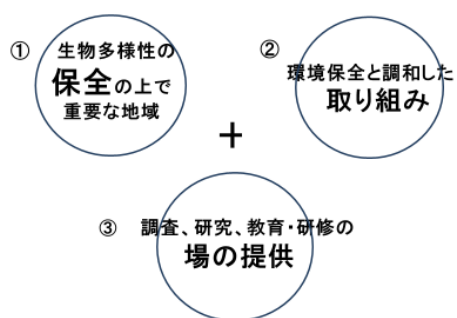
## (2) 残された課題とユネスコエコパーク

「キャンプ事業」を担う「えらぶ年寄り組」に残された課題は、ユネスコエコパーク地元の成員としてのあり方である。口永良部島は、2016年に屋久島・口永良部島ユネスコエコパークとして拡張申請が認められた。エコパークとしての口永良部島（島民や団体、地区）には、3つの機能が要求されている（Appndix 図1）。

要求される3つの機能を「えらぶ年寄り組」に当てはめると、③の「場の提供」は、「キャンプ事業」を運営する「えらぶ年寄り組」には要件を満たしていると云える。しかし、②の「自然環境の保全と調和した持続可能な発展の取組」つまりは「自然を暮らしに活用する」点は達成できていない。

「えらぶ年寄り組」にとって、②の「自然を暮らしに活用する」課題を実現する方策はエコツーリズムの観点からキャンプ事業を見直すことである。

### ユネスコ・エコパークに要求される 3つの機能



Appndix 図1  
ユネスコエコパークに要求される3つの機能

## (3) エコツーリズムとしての「キャンプ事業」

日本エコツーリズム協会のエコツアー総覧には約400件のエコツアー企画がリスト化されている。そのいずれもが、参加者が自然を体験する中でツアーを楽しむ企画であり、えらぶ年寄り組の「キャンプ事業」のように、ボランティア活動をツアーの内容とした企画は見当たらなかった。「キャンプ事業」では、参加者は自然を楽しむだけでなく、生物多様性の保全の役割を果たすと云う受動・能動の双方向性がある点でユニークであると云える。

## [6] 「キャンプ事業」の展望

「キャンプ事業」は多くの点でエコツーリズムの要件を満足しているが、欠けている要件がある。それは、キャンプ事業が「えらぶ年寄り組」のボランティア事業であるため、かならずしも持続的な事業となっていない欠点がある。ユネスコエコパーク地元の成員である「えらぶ

年寄り組」として「自然を暮らしに活用する」ためには、「キャンプ事業」を生業として位置づけ有料化し、財政基盤を整えなければならない。そのためには運営体制を整備して、責任のとれる体制を構築する必要がある。マーケティングの必要もあろう。もっとも大きな障害は、マンパワーが不足しており「えらぶ年寄り組」単独では生業化が困難なことにある。

このように「キャンプ事業」を生業として「暮らしに活用する」課題は、「えらぶ年寄り組」のあり方としての問題にとどまらない。離島である口永良部島の活性化にも直結している。実現には、多くの問題点を抱えており高い壁があるが生業化を念頭に努力し、将来への展望を切り開きたい。